福島県県外避難者帰還・生活再建支援補助金
事業評価調書

特定非営利活動法人フュージョン社会力創造パートナーズ

事業名	茨城の魅力を知る避難者主体の交流会事業、及び戸別訪問事業
事業の内容 事業の目的	【事業内容】 以下の２つの事業を柱とする。 １．茨城の魅力を知る避難者主体の交流会事業 ・避難先である「いばらきの魅力を知る」ための交流会を６回、一部避難者や帰還者が主体で実施する。具体的には家族向けに「いばらきの美味しいを食べる」交流会として、蕎麦打ち交流会（桜川市）、秋のぶどう狩り交流会（行方市）、ゼリーなどのスイーツ作り交流会（つくば市）、春のイチゴ狩り交流会（つくば市と鉾田市で各１回）、稲敷地区のまち歩き交流会第５弾（牛久市を予定）で行う。 ・今年度も、一部は避難者や帰還者が主体となった交流会として、地元民政委員やふうあいねっと、筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 311、筑波学院大学 OB 有志など、地元支援者と連携しながら実施する。 ・交流会参加費用は、一部を参加者負担とする。 ２．戸別訪問事業 ・令和３年６月１日から令和４年３月 31 日まで適宜実施する。 ・昨年度に実施した大規模訪問の中で気になる高齢者（独居を含む）世帯、子育て世帯を中心に、茨城県つくば市、つくばみらい市、旧稲敷郡（美浦村、稲敷市、阿見町、牛久市）、鹿行地域（鹿嶋市、波崎市）等の茨城県南、鹿行地域への避難者（一部は自主避難者）を対象とし、延 100 世帯の訪問活動を行う。 ・その際には、福島県・福島県内各町の復興支援員・各自治体・教育委員会・社会福祉協議会・民政委員・茨城県内への避難者・支援者ネットワーク「ふうあいねっと」・避難者自助グループ・筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 311 ・筑波学院大学卒業生ネットワークなど、多様な避難元、避難先の方々と連携しながら、効果的な戸別訪問を行う。 ・実施方法は、コロナ禍を鑑み、直接訪問だけではなく、一部は電話によって状況確認を行うものとする。 上記の事業を効果的に実施するために、福島県避難者支援課茨城駐在職員、福島県復興支援員（茨城県社会福祉協議会）、ふうあいねっと、日本精神看護協会茨城支部、などとの定期的な情報交換会に参加し、情報共有していく。また、必要に応じて、JCN など他県の避難者支援ネットワークの会合にも参加し、情報交換を行っていく。 【事業目的・必要性】 事故後 10 年を超えても、茨城県内への避難者数が 2,877 人（令和３年２月 26 日福島県発表）と、東京都に次いで２番目に多く、未だに高止まりをしていることを考えると、茨城県内での支援の在り方が他県での避難者支援にも良い影響をもたらことができるようにしていきたいと考えている。 １．茨城の魅力を知る避難者主体の交流会事業 ・避難先での移住を決められた方がほとんどであるため、茨城県が第二の故郷となってもらえるように、地域の良さを「食」「人」「歴史・文化」などを通して、感じてもらう。これにより、茨城に住み続けるにしても、誇りと愛着を持って生活がしていける基盤づくりを行う。 ・平成 29 年度から実施しているいちご狩りやぶどう狩りなどの茨城の旬のものを食べる交流会は、毎回盛況であり、継続開催を希望する声も多く寄せられているため、今年度もニーズに応えられるように継続していく ・特にこの数年、新たに鹿行地域での開催を増やしてきたため、当該地域への避難者の参加も着実に増え、横の繋がりもできてきているおり、さらなるネットワークの推進に貢献していく。まずは、鹿行地域の避難者の集まりを持ちたいと仰る当事者の方も出てきているため、コロナの感染状況も様子を見ながら、その動きも後押しできるようにする。 ・本 NPO は、当事者たる発起人を、あくまでも黒子としてサポートすることで、当事者の主体性を引出し、自ら課題解決に向けて、連携や意見交換できる基盤作りをするものとする。そのために会の運営に当事者に関わって頂くスタイルで継続して取り組んでいく。 ・震災後 10 年を経過しても、まだ茨城に移って来られる方も出てきているため、そのような方の茨城での窓口となり、茨城に来て良かったと思ってもらえるようなプラットフォー

	ムとして交流会を位置付けておく。 ・筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 3.11、筑波学院大学卒業生ネットワークとも連携することで、次世代の地域社会の担い手と避難者とが繋がる機会ともする。 ・コロナ禍、人との交流が大きく制限されているが、可能な限り交流会を継続していくことで、孤立防止に寄与していく。 ２．戸別訪問事業 ・昨年度実施した延 200 世帯を超える 10 年節目の大掛かりな訪問活動のフォローをする意味でも、今年度はその中でも特に高齢者（独居含む）世帯、子育て世代の訪問活動を中心に継続して実施する。 ・震災後 10 年を経過してもほとんどの方が未だに住民を福島から移していない、という微妙な立ち位置にいることや、１件１件の課題は深刻なケースが目立ってきており、また、高齢者を中心に亡くなる方、体調を崩される方も多いため、継続して木目細かな寄り添ったパーソナルケアに取り組んでいく。その中で、より個別の実情に応じた専門機関や地域に繋いでいくことで、ニーズが表面化しにくい、声が挙げにくい、体調が万全でない、地域付き合いが上手くできない、などの環境に置かれている避難者の生活をサポートし、セーフティネットに繋げていく。 ・コロナ禍、人との交流が大きく制限されているが、可能な限り訪問活動を継続していくことで、孤立防止に寄与していく。 ・１．交流会で繋がった関係を２．戸別訪問でのパーソナルケアに繋げていくことで、交流会と戸別訪問２つの活動が相乗効果を持たせられるように、引き続き努めていく。 ・つくば市を除く県南地域と鹿行地域で支援活動を行っている団体は、自助グループを除いては当 NPO だけとなっているため、一部地域リーダーにも関わって頂きながら、避難者と地域、また避難者同士のセーフティネット作りをしていくことを目的とする。 ・筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 3.11、筑波学院大学卒業生ネットワークとも連携することで、次世代の地域社会の担い手と避難者とが繋がる機会ともする。
事業実施内容	１．令和３年６月１日～令和４年３月 31 日：戸別訪問活動 ●訪問延 116 世帯（実質 53 世帯。訪問先：茨城県南と鹿行地域への避難者。一部電話連絡による傾聴を含む。） ●戸別訪問実働人数：５名 ２．令和３年 10 月 31 日：蕎麦ピザ作り交流会 ●内容：土浦市小町の館で作られた蕎麦粉を生地に使った手造りの蕎麦ピザ作りを通して、茨城の良さを知り、相互に交流を図ることを目的として開催 ●場所：土浦市小町の館 ●参加者：17 名（避難者７名、支援者 10 名、うち子供１名） ●支援者参加者 :NPO フュージョン社会力創造パートナーズ、ふうあいねっと、Tsukuba for 3.11 ３．令和３年 11 月 21 日：私には私のチョコレートパフェ作り交流会 ●内容：いばらきで活躍しているお菓子料理家（チョコレートパフェ研究所）からチョコレートパフェの歴史やおいしい作り方を教わり、チョコレートパフェを通して相互に交流を図ることを目的として開催 ●場所：つくば市豊里交流センター調理室 ●参加者：25 名（避難者９名、支援者 16 名、うち子供４名） ●支援者参加者 :NPO フュージョン社会力創造パートナーズ、ふうあいねっと、Tsukuba for 3.11

４．令和４年３月３日：稲敷地区まち歩き交流会 in 筑波山神社（第８回稲敷地区交流会）
●内容：８回目の稲敷、美浦、阿見、牛久、土浦地区の交流会
●場所：筑波山神社（つくば市）
●参加者：12 名（避難者７名、支援者５名）
●支援者参加者：ふうあい県南の会メンバー、NPO フュージョン社会力創造パートナーズメンバー、地域協力者、ふうあいねっと

５．令和４年３月６日：イチゴ狩り交流会 in 鉾田
●内容：「いばらきのおいしいを食べる」ことで茨城県の理解を深め、おいしい食を通して相互に交流を図り、また鹿行地域避難者同士の交流を図ることを目的として開催
●場所：深作農園（鉾田市）
●参加者：23 名（避難者 19 名、支援者４名、うち子供６名）
●支援者参加者：NPO フュージョン社会力創造パートナーズメンバー、ふうあいねっと

６．令和４年３月 12 日：イチゴ狩り交流会 in つくば
●内容：「いばらきのおいしいを食べる」ことで茨城県の理解を深め、おいしい食を通して相互に交流を図ることを目的として開催
●場所：かわらけや（つくば市）
●参加者：20 名（避難者 16 名、支援者４名、うち子供４名）
●支援者参加者：: NPO フュージョン社会力創造パートナーズ、ふうあいねっと

事業達成度	本事業は避難者のパーソナルケアのための戸別訪問と茨城の魅力を知るための交流会の２つの活動を柱とした。多くの避難者は住民票は未だ福島県のままであるものの、このまま茨城で住み続ける意向を持っているため、今後の茨城での暮らしをより魅力的にできるように、茨城県内の名所を一緒に見て回ったり、美味しい食べ物を一緒に満喫することで、茨城県の良さを知ってもらい、その中でなるべく地域の人的資源に関わってもらえるような組立を行った。 １．訪問活動によるパーソナルケア 昨年度は10年節目ということもあり、茨城県南を中心に鹿行地域、県央地域にまで従来よりもエリアを広げて延213世帯（実質101世帯）の大規模な訪問活動を行った。 今年度は、その中でも訪問を受け入れて下さる約50世帯に的を絞って訪問活動を継続した。 コロナ禍、人と交流する機会も限られ、密に情報交換をすることも減ったため、概ね訪問を喜んで下さる方が多かった。また、昨年度よりもコロナに対する不安も減ってきたため、昨年度よりも長い時間話をする時間も取れるようになり、話し込むことも多かった。当NPOの支援者が約200kgのお米を寄贈してくださったことから､それを配布することも兼ねた訪問を行えたことも効果的であった。 時間の経過とともに、癌や脳梗塞などの病気になる方も増えてきており、本人のみならず家族が闘病を支える世帯も続々と出てきており、体調に関する話題も増えてきている。その点では、つくば市周辺の医療機関の充実ぶりに対する満足度は高い。 訪問範囲も、当NPOのお膝元であり、人的ネットワークを備えたつくば市やつくばみらい市、旧稲敷郡（阿見町、美浦村、牛久市、稲敷市）を中心に、鹿嶋市、石岡市まで比較的広範囲にかなり木目細かに訪問をすることで、当事者に寄り添った、セーフティネットとしての役割を担えているものと考えている。 鹿行地域（鹿嶋市、鉾田市）では、これまでの当NPOの交流会で緩やかな繋がりができ始めていたが、リーダーとして交流会を開催したいと仰って下さる当事者の方が出てきたため、コロナが落ち着いてからとなってしまうが、一度当事者主体で集まりを持ちたいと考えている。 今後も、一人一人の実情に合わせたパーソナルケアを大切に、継続した関係性を創り上げていくために、訪問活動にウエイトを置いていきたい。 ２．茨城の魅力を知る避難者主体の交流会事業 ほとんどの方がこのまま茨城県で生活される意向を持っているため、各交流会では第二の故郷となる茨城県での魅力的な食べ物、人、場所に触れられる機会となるような工夫を凝らしてきた。コロナ禍１回（ぶどう狩り交流会）は止む無く中止となったものの、コロナと施設の事情により延期となった２回の交流会を含めて６回の交流会を開催し、合計77名（うち避難者42名、支援者名35名）の参加があった。コロナによる外出控えのため、例年ほどの参加人数には達しなかったものの、コロナが落ち着いてきたこともあり、昨年度は参加をためらっていた方が参加を再開され始めたり、という傾向も見られ始めた。 参加者アンケートからは、茨城の魅力を知る機会、同郷の方と直接話をする良い機会となった、という回答に加えて、コロナ禍直接人に会えない辛さを払拭する良い機会となった、との回答もあり、みんなで楽しめる交流会として、満足度の高いものすることができた。 ３．当事者主体の交流会の開催 今年度開催した交流会６回のうち、２回は当事者と帰還者の方が企画メンバーに入り、また、金額を要する交流会は、当事者からも一部金銭的負担を徴収する形で開催した。このことで、なるべく当事者の視点を取り入れた会とし、継続的に開催できるように工夫を行った。 ４．筑波学院大学卒業生、筑波大学学生支援団体Tsukuba for 311との連携 今年度の交流会活動には、継続して地元に根付いた筑波学院大学卒業生や筑波大学学生支援団体Tsukuba for 311などの若い世代との連携を行い進めてきた。交流会には高齢者、

	家族世帯からの参加が多いため、普段なかなか関わることの少ない若い世代との交流は、若い世代が入るだけで雰囲気が変わり、場が明るくなる、という点で好評であった。一方で、学生を始め、若い世代側にも自身が幼少期に起こった災害に対する学びの点で、次世代が現状を知り、今後について考える上で、非常に効果的なものであると考える。 ５．定例会での情報共有・他の支援団体との連携 福島県主催の毎月の定例会でふうあいねっと、福島県復興支援員、浪江町復興支援員、日本精神看護協会茨城支部などと情報交換をしたことで、茨城県全域での被災者の状況を把握し、必要に応じて訪問活動や交流会活動で連携しながら支援を行う事ができた。また、当 NPO が主催する交流会にふうあいねっとスタッフも協力してもらうことで、避難者との新たな繋ぎにも繋げることができた。
今後の目標	震災から 11 年を超えるが､病気やコロナなど課題を抱えている人も増えてきているため、引き続き、以下の事に重点を置いて、寄り添った活動を関係組織や地域リーダーと連携しながら行っていくことで、セーフティネットに繋げていく。 １．避難者に寄り添ったパーソナルケアの継続 今年度行った約 50 世帯の訪問活動を継続して来年度以降も行い、特に独居や高齢の方、病気などの課題を抱えられている方を中心として、訪問活動から把握できたニーズを基に、寄り添っていく。このことで、表面化しにくい避難者の声を丁寧に拾い上げ、各支援団体、地域リーダー、専門機関、福島県などに共有し、セーフティネットに繋げていく。引き続き、筑波学院大学卒業生や筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 311 などの若手にも協力してもらう。 ２．避難されている当事者が主体となった交流会の開催 交流会開催に当たっては、継続して、避難者や帰還者に協力して頂くことで、当事者が主体となった活動を行っていく。特に企画、広報、当日運営の面で、連携を行う。 ３．茨城の魅力を共有する交流会の実施 今後も、茨城の魅力を発信し、共有できるイベントとすべく、茨城県内の様々な社会資源と協働して交流会を開催する。開催場所も、引き続き、茨城県南、鹿行地域とし、避難されている方同士の繋がり作りに貢献していく。 ４．ふうあいねっと、福島県・福島県復興支援員、避難者自助グループ等との連携 これまで同様に、毎月福島県が主催する定例会などで当 NPO の活動を他の団体に共有したり、他の団体の動きと連携しながら効果的な活動にしていくために、ふうあいねっとや福島県・福島県復興支援員、日本精神看護協会茨城支部、避難者自助グループ等と連携をしていく。 ５．コロナ禍での活動 コロナ禍に対する慣れも出てきて、これまで以上に訪問を喜んでくれたり、交流会を楽しみにしてくれていた方もいたため、感染防止に最大限の注意を払いながらも、できる範囲での活動を継続していく。